

令和4年度 第1回豊田市社会福祉審議会地域福祉専門分科会  
第1回地域福祉活動推進委員会 合同会議 議事録

日時：令和4年7月29日（金）午前10時～12時  
場所：豊田市役所南庁舎7階 南73委員会室  
豊田市福祉センター4階41会議室

## 1 出席者

### (1) 豊田市社会福祉審議会地域福祉専門分科会

#### ①地域福祉専門分科会委員

<会場参加>

伊藤 大介（日本福祉大学社会福祉学部助教）、稲垣 令一（豊田市高齢者クラブ連合会）、  
岡田 政美（豊田市民生委員児童委員協議会）、小松 理佐子（日本福祉大学社会福祉学部教授）、  
阪田 征彦（障がい者支援施設 むもん）、坂元 玲介（とよた多世代参加支援プロジェクト）、  
佐合 恭治（市民公募）、松本 清彦（一般社団法人豊田市身障協会）、  
水野 和之（豊田市区長会）、村瀬 和好（市民公募）、  
山田 美津子（豊田市ボランティア連絡協議会）

<リモート参加>

幸村 的美（豊田市社会福祉協議会）、山村 史子（名古屋医専教官）

②事務局 福祉部 柴田部長、柴田副部長、梅田参事  
地域包括ケア企画課 花木課長、伊地知副課長、小林担当長、鈴木主査

③関係課 福祉総合相談課 橋本副課長

### (2) 豊田市地域福祉活動推進委員会

#### ①地域福祉活動推進委員

<会場参加>

安藤 忠司（下山支所推進委員会）、梅村 悦子（豊田市民生委員児童委員協議会）、  
木本 光宣（ユートピア若宮）、酒井 保彦（豊田市自主防災会連絡協議会）、  
鈴木 隆之（豊田市区長会）、鈴木 理香（トヨタ地域包括支援センター）、  
中屋 浩二（梅ヶ丘学園）、伴 幸俊（豊田地域医療センター）、  
松尾 英樹（豊田市高齢者クラブ連合会）、三井 克哉（豊田市特別養護老人ホーム施設長協議会）、  
八鍬 幸雄（ボランティアセンター運営委員会）、山村 史子（とよた市民福祉大学運営委員会）

<欠席者>

江口 秀和（連合愛知豊田地域協議会）、加藤 国治（豊田市介護サービス機関連絡協議会）

②事務局 豊田市社会福祉協議会  
中田事務局長、安藤事務局次長、鈴木地域福祉推進室長、総務課：中村課長、  
橋本副課長、北野担当長、豊寿園：川合所長、障がい者総合福祉会館：渡辺館長、  
共生推進課：大谷課長、大地副課長、佐藤担当長、鈴木進担当長、加藤主査、淵主事、  
川上相談支援専門員、くらし応援課：永井課長、中田担当長、基幹包括支援センター：  
浦川所長、東部ブロック：川合ブロック長（兼足助支所長）、西尾主事（足助支所）、  
中村支所長（稲武支所）、鈴木崇支所長（下山支所）、西部ブロック：小澤ブロック長  
（兼藤岡支所長）、小野田主査（旭支所）、都築支所長（小原支所）

## 2 次第

- (1) 福祉部長あいさつ
- (2) 新任委員紹介
- (3) 地域福祉専門分科会 専門分科会長、副専門分科会長の選任
- (4) 専門分科会会長、副専門分科会長、推進委員会委員長あいさつ
- (5) 議題 第2次地域福祉計画・地域福祉活動計画の改訂について 【資料1】
- (6) 連絡事項

## 3 議事録（要旨）

- (1) 福祉部長あいさつ
- (2) 新任委員紹介
  - ・ 事務局から所属と名前を読み上げて紹介
- (3) 会長・副会長の選出
  - ・ 委員の互選により、役員を次のとおり決定した。

役職	氏名
分科会長	小松 理佐子
副分科会長	幸村 的美

- (4) 専門分科会会長、副専門分科会長、推進委員会委員長あいさつ
- (5) 議題 第2次地域福祉計画・地域福祉活動計画の改訂について 【資料1】
  - ・ 計画の概要、改訂の考え方・スケジュール
  - ・ 前期取組実績
  - ・ 社会情勢等の変化（改訂版で意識する視点）
  - ・ 新たな取組内容（案）

### (6) 主な意見

#### ①基本目標1について

#### 【委員】（推進委員会）

- ・ 新型コロナウイルス感染の影響で、ボランティア活動にも随分制限があり、それによって活動を休止、なかには止めてしまう方やグループもあった。
- ・ そのような中、社会福祉協議会ボランティアセンターでは、やれることは工夫してやろうということで、ボランティア講座や体験会など、啓発、育成、養成に力を入れて取り組んでいると聞いている。
- ・ 社会福祉協議会ボランティアセンターには、引き続き、市民への啓発・ボランティアマインドの醸成に力を入れて取り組んでいただくと良い。

#### 【委員】（推進委員会）

- ・ 下山では7つの自治会が合同で2か月に1回、主要なメンバーで集まり、防災・福祉を議題に話し合いをしている。主なメンバーは7つの自主防災会会長、副会長、区長、民生委員、消防団、女性消防クラブ、高齢者クラブ、猿投・下山支所と社協の下山支所の職員。
- ・ 今までは防災マップを一家に一枚、ポストに入れて回っていたが、今回は1人1人が自分の携帯電話で見れるようなシステムを構築した。

- ・ 要支援者名簿で一番重要なのは地域支援者。地域支援者の欄に名前が埋まっていれば良い、ということではなく、いざという時に本当に動ける人が入っているかという点を意識しながら今後も進めて行きたい。
- ・ 要支援者名簿については区長や民生委員には5月頃に届くが、自主防災会長には9月頃にしか届かない。要支援者名簿を地域で展開するときに、誰が中心となるか、誰がコーディネートするのかを決める必要がある。区長、民生委員、自主防災会などいろいろな役割があるが、私は自主防災会がコーディネートをして、長年に渡って継続していくべきだと考える。
- ・ 地震でいうと365日いつ来るか分からないが、雨や水の災害については、6～9月とある程度想定ができる。そう考えると、自主防災会の手元にも新しい要支援者名簿が5月までにあるべき。今後も検討してほしい。

## ②基本目標2について

### 【委員】（専門分科会・推進委員会）

- ・ コロナ禍ということで、大学の開講をどうするか運営委員会で議論しましたが、学びの場を提供したいということになり、開講し続けている。今年度で第7期になるが、福祉入門コースで182名、家庭介護コースで150名、計332名の方々が修了された。
- ・ 修了後のフォローアップとして、認知症理解専門講座、修了生のシンポジウムを開催し、地域福祉活動の担い手となるよう支援している。このように開講し続けていくことが担い手の支援となり、修了生のために相談を受けることが大事。
- ・ 社会福祉協議会においては、引き続き、とよた市民福祉大学をはじめ、地域福祉の担い手づくりに積極的に取り組んでいただきたい。

### 【委員】（推進委員会）

- ・ 市内の福祉専門人材の育成・確保というのは、様々な取組があるが、社会福祉協議会が行っている、とよた市民福祉大学、初任者研修、かいごの仕事相談会、これが段階的なステップの仕組みとして作られていると感じ、その成果が出ていると感じる。
- ・ 私ども介護事業所、介護施設としては、やはり人材の確保が急務である。育成された人材が1人でも多く、就職として介護業界へ入ってもらえることがありがたい。
- ・ そのためには自分たちの努力も必要であるが、市役所、社会福祉協議会、各介護事業所がそれぞれ努力して介護人材の育成に取り組んでいきたい。
- ・ 昨年行われた、かいごの仕事相談会で、就職につながった人数が分かれば知りたい。
- ・ 実績報告では「順調」となっているが、これで成果が出たからと言って「達成」にして終わりではなく、今後も継続して取組が必要。今後の取組みの予定があれば知りたい。

### 【事務局】（社協）

- ・ 昨年1月に開催された、かいごの仕事相談会の参加者に追跡調査を行ったところ、14名が介護事業所に就職したことが分かった。
- ・ 今年度の取組としては、初任者研修、かいごの仕事相談会はどちらも2回、開催予定。初任者研修については、福祉センターと下山の2か所で40名の参加者を目指す。
- ・ かいごの仕事相談会は、8月と1月に開催を予定しており、8月には各学校へのPRを強化している。介護事業所にもぜひご協力をお願いしたい。

### 【委員】（専門分科会）

- ・ 私どもは知的障がい者を支援している事業所だが、計画の理念にあるように、障がいがあっても本人らしく生きられる社会を目指している。「働く」ということがとても重要で、働くことで役割が見つかり、本人の生きがいになる。また働くことで、お互いが共感できたり、感謝されたりというような関係性を作ることができる。事業所では農業を中心にやっており、本人の活躍だけではなく、地域の困りごとを、障がいの有る無しに関わらず一緒に考えていく仕組みが大事。

### ③基本目標 3～4について

#### 【委員】（専門分科会）

- ・ 多世代参加支援プロジェクトの簡単な説明をしますと、保険制度に当てはまらない人たち、特にコロナ禍において、自宅で引きこもっている人や、病院に行けない人、地域の活動にも出られない人、8050 問題に該当するような人たちを介護保険や障がいのサービスではなく、多世代のさまざまな団体が関わり合いながら、複合的な課題を解決する取組。
- ・ 今現在、多世代参加支援プロジェクトは 60 名の団体が登録している。主に福祉団体、農業団体、社会福祉協議会、個人団体、障がいや介護の団体、子ども支援を行っている団体が登録している。
- ・ あくまでも行政主導ではなく、民間主導で地域の困りごとを地域の区長会や交流館と協力しながら、課題を掘り起こす取組を昨年度から行っている。
- ・ 私は主に高齢者の活動をメインで行っているが、障がいや子どもの制度を知らなかったので、昨年度は、毎月勉強会を開催し、「お互いを知る」というテーマで、いろいろな団体が何をやっているのかを勉強し、実際に出向いて、会に参加したりした。
- ・ 2 年目となる今年度は、知るところから実際に「働く」や地域の困りごとに「つなぐ」取組を始めています。困っている人の情報を拾い上げることが難しいが、今後いろいろな地域の団体にご協力いただきながら、地域の困りごとやニーズを把握しながら進めて行きたい。例えば、喫茶店に行ってみるなどの小さなことから始めて人と関わる社会参加を増やし、就労へつなげる仕組みを、時間を掛けて作っていききたい。
- ・ 多世代参加支援プロジェクトとしても、まずは民間が横連携を取りながら、行政とも連携を取りながら進めていきたい。

#### 【委員】（専門分科会）

- ・ みんなが活躍できる社会を目指そうと思うと、今までサービスだけではなくて、横連携を密にすることが重要である。
- ・ お互いを知ることも大事だが、知ったあとにつなぐ、コーディネート力が求められる。
- ・ 計画を進めるにしても、資料には「順調」と書いてあるが、具体的に何が順調で何が問題なのかが分からない。問題を共有した方が、よりみんなが関われる機会が多くなり、ネットワークも太くなると思う。

#### 【委員】（専門分科会）

- ・ とよた多世代参加支援プロジェクトという取組を始めて知った。民間主導ということだが、市としてはどのようなスタンスか、予算等が知りたい。

#### 【事務局】（市：福祉総合相談課）

- ・ とよた多世代参加支援プロジェクトを立ち上げの頃から、福祉総合相談課も会の会員として所属しており、関わっている状況。予算は、多世代参加支援プロジェクトと市で協定を結んでおり、負担金を 400 万円支払っている。具体的なスキームは、福祉総合相談課や各支所の福祉の相談窓口で、困りごとを抱えた市民が相談に来た時に、まずは福祉サービスにつなぐが、そこでも支援につながらない場合は、多世代参加支援プロジェクトの創意工夫を活用して新たなメニューを作り、支援につなげるということを連携しながらやっていく。

### ④社会情勢等について

#### 【委員】（専門分科会）

- ・ 孤立・孤独やヤングケアラーの根底には、助けてと言いつらいあるいは言えない状況がある。どうやって助けてと言いつらい環境にするかという、1 つは居場所を作ることにつながりを実感すること。これは豊田市でも取り組んでいると思うが、そこからさらに一歩進んでいくと、つながりや居場所の中で、出番ができたかということを見てほしい。なぜかという、人が助けてと言いつらい時というのは、自分も何か相手に役に立っていたり、貢献できていると感じる時だから。一方的に助けて貰うだけの立場は、なかなか助けてと言いつらい。

- ・ 今後指標として、参加して役割が増えたか、持てたかということが確認できると良い。
- ・ ヤングケアラーの調査が少しずつされていて、中高生がなぜ相談しないかという所を見ていくと、純粹に相手がいけないというのもあるが、やはり相談しづらいと感じている。さらに、詳細を見ていくと、家族が介護を要するような状況を先生や学校の友達に話すと、「同情されるのが嫌だ」というような考えもある。
- ・ 最もだと思うが、「助けてもらうことは悪いことじゃないんだよ」、「人は助けてもらいながら、時に助けながら生きてるんだよ」という意識の部分を変えていく必要がある。
- ・ 社会福祉協議会でやっている福祉実践教室では障がいのある方等について理解しようというアプローチが多いかと思うが、もちろんそれも大事なことだが、その一連の流れの中で、自分も助けてもらっていいんだよ、ということ福祉教育の中で若いうちから学べると、難しい問題を抱えた状況に陥った時に、実際に相談するという行動に結びつきやすくなる。
- ・ 中高生、小学生など若い世代への働きかけにおいて、助けて貰うことへの意識が、福祉教育や福祉の多世代交流の中で、どう変容していったかということ注視していくと、成果としては良いのではないか。

#### 【委員】（推進委員会）

- ・ 卒園していく子どもたちを見ていく中で、実感レベルでの紹介ではあるが、ケースバイケースだが、親などから心理的虐待などを受けて施設へ来る子がいる中で、施設を出なければならぬ年齢になった時に、頼れる相手がいけない場合が多い。そうすると施設内の職員を頼ってくるが、施設を出た後も毎日のように電話が掛かってくると負担になるという生の声も聞こえる。
- ・ まだ施設の職員に相談できる子は良いが、悪いんじゃないかと気を使ってしまうと、SNSを使って、悪い大人に騙されて、搾取されるようなケースもある。
- ・ ケアラーという養護施設などの社会的養護を経験した子たちの課題というのは、孤立化と金銭管理の問題に集約されている。このような私たちが実感している課題やケアラーの生の声を、事業に反映させていけるように私たちが発信していきたい。

#### 【委員】（推進委員会）

- ・ 我々としては、健康寿命をいかに伸ばしていくか、介護費用、医療費の負担軽減をしていきたい。その中で元気アップ教室やふれあいサロンなどが連携して、より小さなコミュニティで展開できると良い。
- ・ 高齢者でも声掛けや散歩のお手伝いなど、多少世の中に役に立つようなお手伝いをしていきたい。また、高齢者クラブが活躍できる取組があると良い。

#### 【事務局】（社協）

- ・ 計画にもあるとおり居場所づくりが重要と考える。社会福祉協議会では地域ふれあいサロンや子どもの居場所づくり、行政では元気アップ教室など様々な居場所があり、それをさらに推進していく必要がある。
- ・ 高齢者の居場所が増えることが、高齢者の元気につながり、そこでさらに出番や役割を作っていくということも重要なポイントであるため、後期計画に反映していきたい。

#### 【委員】（推進委員会）

- ・ 憩の家などがあることで、人がたくさん集まってくる。そのような場所の助成や補助を上げてもらえると、担当者が手配しやすくなるため、ぜひご検討をお願いしたい。

#### ⑤新たな取組内容（案）について

#### 【委員】（推進委員会）

- ・ 以前から社会福祉協議会は、個々にはボランティアセンターやとよた市民福祉大学、ヘルパーの講座などの人材育成をやっていたが、今回新規としてあげたのは、人材育成について体系化して横串をさして、連携強化していきたいのではないかと想像する。
- ・ 地域医療センターは病院だと思っている人も多いかと思うが、地域医療センターでも人材育成をやっている。40年前から地域で活躍する看護師の学校があり、3年前から在宅医療を担う看護師、セラピストなどの

医療人材を育てるセンターを立ち上げている。

- ・ 医療と介護と福祉がどのように連携していくかが、この地域福祉計画の大きなテーマだと思う。我々も歩き出したばかりだが、コラボしながら一緒に頑張っていきたい。

#### 【事務局】（社協）

- ・ 今までも社会福祉協議会はいろいろな形で人材育成をしている。ボランティアの育成、地域福祉人材の育成、初任者研修、専門人材の育成、成年後見の市民後見人などの育成もしている。
- ・ 第2次計画では住民福祉教育の推進と専門人材の確保の重点取組が分かれている状態である。このあたりを一体的に行っていく検討をしていきたい。また、人材登録をしながら、確実に地域福祉の担い手となるようなマッチングを推進していきたい。
- ・ 昔から保健・医療・福祉と三位一体で言われている。そういったことも踏まえて、医療人材の育成と連携ということで伴委員に新たに委員に入ってもらっているため、忌憚のない意見を頂きながら進めていきたい。

#### 【委員】（専門分科会）

- ・ 助け合いの精神は非常に大事。昔は向こう三軒両隣、何も言わずとも助け合いができたが、今は核家族化や少子化の背景もあり、人には言いにくい状況だと思う。
- ・ 相互扶助、人はお互い支え合うんだという気持ちを、強く子どもに植え付けないと、一生懸命仕組みや体制を作っても、物が活かない。
- ・ 核家族で親が子どもをしつけるということも、なかなかできていないと感じるが、私は、母親から「困った人がいたら助けてやるんだぞ。」ということは常々言われていた。こういう言葉を今の親で言っている人がどれくらいいるか。
- ・ 第2次計画策定時のアンケートでは、となり近所で助け合いの活動を行っている市民の割合が、減っているという結果が出ているが、この数値はますます低くなっていくと思う。
- ・ 地元の団地でも少子化、核家族化が進んでおり、人の入れ替えが多いが、隣の人が挨拶に来ないこともある。このような状況を変えるためには、子どもへの教育が大事。心に訴えないと、計画にあるような体制を作っても、仏作って魂入れずとなってしまう。
- ・ 子どもの居場所づくり事業として、現在は48か所あるが、そういう場を通じて、「困っている人がいたら助けるんだぞ」と、親じゃなくても地域の人間が言っていくことが大事。

#### 【委員】（専門分科会）

- ・ ヤングケアラーの問題は介護と同じで、家庭の中の問題で済まされない状態にあり、社会問題として取り上げるべき。これは介護保険が始まった時も同じことが言われていた。元々ヤングケアラー自体の内容は、昔からあったことだと思うが、そこに焦点が当てられるのは、そういう家庭が増えてきたという背景から。
- ・ 要支援者の避難行動でも同じことが言えるが、支援してほしいという人たちはなかなか声をあげられない。今は個々の時代になってきているため、集団としては扱いにくいし、支援してほしい人を見つけるのは困難。
- ・ 学校側でも個人情報等の問題が出てくるかと思うが、どのように関連する団体に公開していくかが課題。
- ・ 市としてアセスメントシートはどのように使っていくか、方針が分かれば知りたい。個人面談時に使うのか、学校の先生が独自で見ると判断するのか。

#### 【事務局】（市：福祉総合相談課）

- ・ アセスメントシートとは、簡単に言うとヤングケアラーに該当するかどうかのチェックシート。
- ・ ヤングケアラーの問題として、まずヤングケアラーそのものが認識されていない、学校や福祉の現場で、関わる人が対象者がヤングケアラーかどうか分からないという状況がある。このシートを利用して、把握できるように、シートを作成している段階。
- ・ 計画上の段階ではあるが、学校現場で先生にアセスメントシートを配布して、学校の中で発見してもらえるような取組を進めていこうと考えている。

#### 【委員】（推進委員会）

- ・ ヤングケアラーや孤独・孤立している人たちにも、出番や役割があると良いという発言があったが、私はずっと前から、障がいがある人も活躍できる社会であるべきと考えていた。障がい者、ヤングケアラーなどの属性に関係なく、みんなが活躍できる社会を大前提にしないと進んでいかない。
- ・ 福祉実践教室でも、このような話ができるが良い。

#### 【委員】（推進委員会）

- ・ 高齢者のヤングケアラーや成年後見制度など、相談が複雑化している。包括支援センターだけでは対応できない課題が多くあるため、多職種で連携しながらやっていきたい。
- ・ 要支援者を対象としているが、少しの支援で生活できることが多いため、家事支援をヘルパーに依頼することが多い。しかし、場所によっては、人材が不足しており支援の調整がうまくいかないこともあるため、地域福祉人材センターにはヘルパーや生活支援のコーディネーターが育つことを期待する。
- ・ 高齢者の生きがいというところで、元気な高齢者も含めて、退職後も雇用や有償・無償ボランティアなど様々な道があるが、運動と健康と併せて社会参加することが元気でいる秘訣だと実感している。
- ・ また、要介護者でも認知症の人含め自分らしい生活を送るために、支援されるだけじゃなくて、自分も役に立ちたいという思いがある。
- ・ 支援する側も支援される側も、市民の方含め気軽に協力できて、お互い手助けできるような仕組みができると良い。

#### 【委員】（専門分科会）

- ・ 中間見直しということで多くの委員から貴重な意見を頂くことができ、大変良い会になった。
- ・ 最初に令和2～3年度の報告の中で、コロナもあったが多くの事業が順調また概ね順調となっているのは、ここにいる皆様の頑張りと成果である。
- ・ 現在の計画の最終年度である令和7年度は、2025年であるが、この期間内に目標値を達成するという事は必要なことではあるが、達成して十分かという十分とは言えない。
- ・ 目標値を達成することに加えて、例えば、地域福祉の担い手づくりで言えば、実際に地域のみなさまがどこかで活躍できて、初めて順調と言える。そのために、地域福祉人材センターで、マッチングをすることが重要だと考える。
- ・ また、ヤングケアラーの話で言えば、相談できない人たちにこちらからアプローチして、掴んでいくアウトリーチ的な活動、そして多くの団体と連携していくことが大事であるが、コーディネートやアウトリーチ、連携というものは数値としてなかなか出づらい。これを数値目標に加えて、いかに達成していくかが、大きなポイントとなる。
- ・ 中間見直しの時点で、達成するにはどのような仕組みを考えれば良いかということも併せて考えていきたい。

#### (7) 連絡事項

事務局から説明

以上